第441号
2019年5月27日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第463回（2019年5月9日）　子どもの本の読書会記録》　参加者：4人　文書参加：2人
時間：10:00～11:30　場所：オーテピア4階集会室

『ガラスの梨　ちいやんの戦争』　越水利江子／作　牧野千穂／絵　ポプラ社

舞台は、昭和16年の大阪。父と母、優しい兄、しっかり者の姉、甘えん坊の弟とともに、家族仲良く暮らしている笑生子は、やさしく真面目で、自然を愛する豊かな感性を持つ女の子です。あだ名は「ちいやん」。昔、小さくて人懐っこかった笑生子のことを、兄が親しみを込めて呼んだのが由来です。そんな彼女の温かい家族の暮らしが大きく変わってしまったのは、その年の冬からでした。

本書は、高知県生まれの作者が、太平洋戦争中に大阪大空襲を経験した自身の母をモデルに制作した物語です。家族の出征に対する喪失感と悲しみ、数回にわたる空からの無差別な爆撃、母が病気で弱っていく絶望感……など、戦時中の壮絶で心がえぐられるような体験が、笑生子の視点で描かれます。

70年以上前の戦争をテーマにした物語ですが、その時代は紛れもなく今につながっていると、作者はあとがきに書いています。そしてその今は、未来に向かう流れの途中でもあります。よりよい未来への道しるべを見つけるためには、どれほど残酷な過去でも、忘れずに見つめなおすことが不可欠だという、作者の強いメッセージを感じることができる物語でした。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●戦争物語というよりも、少女の成長物語として、笑生子の気持ちに沿って読めた。情景や心情の描写も詳しく、目をそむけたくなるような空襲の光景も、笑生子の目を通してすべて一緒に経験できた気がする。大阪の地理が分かるので、出てくる地名を見てどの辺りの話なのかが伝わった。空襲の火の手から海へ逃げる場面では、あんな距離を……と思い、恐ろしい体験を身近に感じることができた。

●参考資料の読み込みがすごくて驚いた。取材も丁寧に行った中で、表現を考え抜いたことが分かり、文章からは訴える力を感じた。前半では、家族の仲の良さ、兄の優しさが伝わった。その兄の戦死はとても辛い。空襲の場面では、火の海が迫ってくる緊迫感や生々しさを感じた。「犬の献納運動」という命令が下された中で、笑生子が飼い犬のキラを守ろうと勇気ある行動をとった場面には、作者の願望と、メッセージが託されていると感じた。

●気持ちが重くなる場面はあるが、読みやすい本だった。表紙のイラストや挿絵もおしゃれで、手に取りやすい。大人にも子どもにも読んでもらいたいという作者の気持ちが込められているのでは。笑生子の気持ちには、どんな時代にも共通しているところがあると感じた。弟をかばったり、姉に頼ったり、動物が好きだったりという子どもらしさは、過去も今も変わらない。戦争が始まった理由や、戦況についてはっきり分からなくても、爆弾や飛行機の名前を知っていたり、意味が分かっていなくても軍歌を歌っていたりするいうシーンに、リアルさを感じた。

●冒頭の、川を時の流れに例えた一節からは、笑生子の生きるための強い信念が伝わってきた。兄弟の中では成年兄やんが一番印象深い。出征するときの「戦争に行く前に、おちびのちいやんがどれぐらい重うなったか、覚えときたい！」と笑生子を抱き上げる成年兄やんの行動は、別れの抱擁のつもりなのか、戻ってくる決意なのか、自分を勇気づけるためなのか……と、色々考えてしまった。戦争体験を語る人が少なくなり記憶が風化していく中で、事実を基盤にして書かれているこの本はとても貴重なものだと思う。

●読んだ直後よりも、時間が経過してからの方が良さが分かったように思う。心優しい兄のあっという間の戦死、母親と幼い妹への長兄の仕打ち、治療を受けられず命を縮めた母親、その母親を子どもながら支えた笑生子、戦時中の生活の苦しさや飢え、空襲と焼夷弾の恐怖……など、次々とシーンが浮かんでくる。笑生子は「どの国にとっても、戦争は人を壊して、悪魔にしてしまう」と言う。けれど、「国家と国家の憎しみは根深く残っても、人が人と心を交わす一瞬は、雲間から差し込む光のように、たしかに、そこにあったかも」という言葉には希望を感じた。

次回　6月13日（木）10:00～11:30　オーテピア4階集会室
📖『星の旅人　伊能忠敬と伝説の怪魚』　小前亮／著　小峰書店